

# 聖地巡礼——ケダルナート



東方研究会専任研究員  
清水晶子

下界で炎暑の夏を迎えようとする五月頃から、雪の解けたヒマラヤの聖地へ通ずる道が開通する。人々は待ちかまえていたかのように、聖地をめざして巡礼の旅を開始する。旅の出发点、ハリドワールやリシケーシからはインド各地からはるばるやって来た大勢の善男善女をのせて、毎日巡礼のツアーバスがくり出して行く。

これから訪れようとするケダルナート、バドリナートは、ガンゴートリー（ガンジス河の源流）、ヤムノートリー（ヤムナー河の源流）と共

に、古くからヒンドゥー教の聖地とされているところである。「神々の谷」——ヒマラヤ山脈の西方にある山深い聖地である。ケダルナートにはシヴァ神、バドリナートにはヴェイシュヌ神のヒンドゥー教の二大神が祀られている寺院がある。それぞれの聖地を巡礼する旅は、魂のふるさと、聖なる河の源流をさかのぼるコースをたどっている。

六月二十四日、私たち一行三十人（ボンベイからの団体二十四人、グジュラートの親娘三人

連れ、バンガロールからの母親と息子）は、リシケーシを出発した。しばらく走ると、ガンジス河沿いに進む道路の幅は急に狭くなり、山中をはうようにガードレールのないカーブの多い道が延々と続く。途中、荷物を頭にのせて一団となつて歩いている巡礼者たちを何度もみかけた。徒歩で巡礼に赴くことは敬虔な行為とされる。信仰心の現われとはいつても、これから先の長い道を思うと気が遠くなる。

デオプラヤーグやルドラプラヤーグといった、枝分かれしたガンジス河の支流が合流する各地点で、ツアーの人々は熱心に沐浴をくり返していく。ヒンドゥー教では、河川の合流点（サングム）が神聖視され、崇拜の対象となつていからである。ヒマラヤの濁った雪解け水は、手足をひたしただけでも、皮膚が真赤になる程冷たかった。

二日目の夕方、ようやくゴウリクンドのロッ

ジに到着した。海拔二〇〇〇メートルほどのこの地から、ケダールナートまで約十五キロの山道を登らなければならない。次の日の早朝、ロツジの下の硫黄温泉で朝の沐浴をすませて、五時半に出立した。馬やカゴにのつてケダルナートまで登ることもできたが、自分の足で歩くことにした。

平坦な道から、いきなり重なつた急坂の登り道が眼前に現われる。歩きはじめてすぐに息が上がり、汗がふき出してくる。茶店をみつけて、ビスケットとあたたかいミルクティーで一息つく。一人のサードゥ（行者）があとからやって来た。竹竿のように細い素足に、プラスチック製の靴をはいていた。マントラを唱えながら、時には讃歌をうたいながら、一定のテンポを保って、確実な足どりで歩いていく。

いつしかサードゥの姿が遠のいていく。ちょうど行程の真中を過ぎたあたりから、溪谷沿い

の傾斜のきつい道が続く。いつのまにか周囲には誰もいなくなつて、一人になつていた。木が一本もない青々とした草原の谷間には、白や黄色の小さな花をつけた高山植物が咲いていた。7〜8月には、一面の花のじゅうたんがこの渓谷をうめつくすという。山間を登りきると、天空をつきさすような真白の雪山の全容が目にとび込んでくる。人々が畏怖し尊崇する聖なる山がまじかに見える。

山のロッジにたどり着いたときは、十二時を少し回わつていた。馬で登つた人たちは、十時には到着していたという。巡礼にふさわしい、けわしい道のりだった。ケダルナートでは、セ



ーターもジャケットも着込む程、気温が下がつていた。でも空気の薄さはほとんど感じられず、息苦しさはなかった。澄みわたつた青空を背景にそびえ立つ雪山に、ただ圧倒されるばかりであつた。ツアーの人たちと一緒にロッジで、野菜カレー、ダール豆のスープ、チャパティー（インドパン）の昼食をとる。

登山の後では、質素でも、温かい食事は何よりのご馳走である。燃料の薪や石炭から先ほどべての食糧・物資が、ゴウリクンドから先ほど登つてきたあの山道を馬の背にのせて運ばれてくる。石造りのケダルナート寺院を建てた人々の熱意と共に、大いなる困難がしのばれた。